

戦略で探る 近江の城

観音寺城

日本最初の石垣の城

滋賀県立大学教授 中井 均

戦国時代の山城は文字どおり、土から成る土木施設でした。兵の駐屯地である曲輪、遮断線としての土塁、堀切といった防御施設は山を切り盛りして築されました。

その土の城を一変させたのが織田信長によって築かれた安土城です。石垣、天守、瓦葺きという江戸時代の城郭の構造は安土築城によって成立します。ところが、石垣については安土城に先行して16世紀前半頃から城郭に導入されます。なかでも観音寺城(近江八幡市)の石垣は本格的な石垣として注目されます。

観音寺城はきぬがさやま織山に築かれた山城で、南北朝時代の築城以後、近江守護の佐々木六角氏の居城となります。その規模は日本でも最大級を誇ります。城郭の全域が石垣によって築かれています。特に注目されるのが、矢穴技法と呼ばれる技法によって、人工的に割った石材を用いていることです。母岩に溝を点々と刻み、そのひとつにたがね鑿を差し込み、げんのう玄能で叩くと、切手のミシン目と同じように、点々と刻んだ溝に沿って石が割れます。割れた石には溝が歯型のように残ります。その打ち込む鑿を矢と言うことより矢穴技法と呼ばれるようになりました。

城郭の石垣にこの矢穴技法で割った石材が用いられるのは天正年間でも後半(1583年頃)からで、もっとも盛行するのは慶長5(1600)年以降に築城された城郭石垣です。その矢穴技法によって割られた石材が観音寺城の石垣で発見されました。

観音寺城の石垣は、金剛輪寺(愛荘町)所蔵の『下倉米銭下用帳』という古文書に、弘治2(1556)年に築いたと記されています。それは安土築城の実に20年も前のことでした。さらに安土城の石垣には矢穴技法で割られた石材は確認されていません。安土城の石垣には近江の最先端技術である矢穴技法が導



入されなかったのです。

観音寺城の矢穴技法は金剛輪寺の技術が用いられたものと考えられます。石垣は武家側にはなかった技術であり、寺院側に備わっていた技術であったと考えられます。それは山岳寺院の石垣構築であったり、五輪塔や石仏などを造立するための技術だったのです。六角氏はそうした寺院側の技術であった石垣を居城に援用したものと考えられます。安土城に先行する技術革新といっても過言ではないでしょう。

今ひとつ観音寺城で注目されるのは、山城という防御施設で居住空間が確認されたことです。恒常化する戦乱によって、それまであくまでも防御空間であった山城に巨大な礎石建物が配置されました。こうした建物はすべて居住施設として構えられたものであり、山城が生活の場となったわけです。さらに山上には六角氏の家臣たちも屋敷を構えていました。まさに観音寺城は天空の都市だったのです。

日本最古の石垣造りの山城だったのですが、石垣は草木に埋もれて見ることが困難でした。それを地元企業の滋賀銀行安土支店が地域活性の一環として樹木の伐採をおこなっており、新幹線から石垣の見える日も近づいています。

中井 均(なかい ひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。